

ドイツの冬を彩る「クリスマスマーケット」——700年続く、人々の知恵とぬくもり

◆ ドイツ発祥の冬の風物詩

最近は、日本でも11月下旬になるとあちこちで見られる「クリスマスマーケット」ですが、その発祥はドイツ、またはオーストリアと言われています。

3大クリスマスマーケットのひとつともいわれるニュルンベルクのクリスマスマーケットについては第14号（2023年冬号）でもお伝えしましたが、今回は起源や他地域のマーケットなどについてご紹介します。



ミュンヘンのクリスマスマーケット屋台

クリスマスマーケットの起源をたどると、ミュンヘン（1310年）、フランクフルト（1393年）など諸説がありますが、いずれにしても、今から700年前、14世紀には始まっていました。日本の行事では、博多祇園山笠がほぼ同程度の歴史のようです。大阪天満宮の天神祭や、祇園祭の山鉾などは15世紀に現在の形になったということですので、ドイツのクリスマスマーケットは、これら日本の伝統的なお祭りより古い行事と考えられます。



ニュルンベルクのクリスマスマーケット

◆ 地域ごとに異なる歴史と宗教的背景

南ドイツ、特にニュルンベルク市のあるバイエルン州は、クリスマスマーケットが盛んな地域です。中世ヨーロッパの東西に延びる交易路のハブであり、常に交易がされていたというのは大きな理由だと思われます。また、南ドイツはカトリック教徒が多く、ニュルンベルク、ミュンヘンのマーケットの屋台の装飾や市場で出会えるサンタクロースなどカトリックを色濃く感じることができます。

同様に長いクリスマスマーケットの歴史をもつ地域にライプチヒ、ドレスデンといった古都を擁するザクセン州があります。この地域も、中世のころから織物・毛織物をはじめとした交易が盛んであり、また、宗教改革者マルチンルターの故郷もあります。カトリックで12月6日に聖ニクラウスがプレゼントを持ってくるとしていた習慣をプロテstantでは、マルチンルターにより12月24日にクリスマスプレゼントを贈ると「改革」されました。



ミュンヘンマーケットのサンタクロース

◆ 人々を温める冬のマーケット

近年ではベルリンやシュツットガルト、ケルンなどドイツの様々な都市で盛大なクリスマスマーケットが開催され、世界各地から観光客が訪れています。一方、大都市近郊の小さな町でも「わが町」のクリスマスマーケットが開催され、地域の人々の日常に密着しています。



クリスマスマーケットは、地域によって特色がありますが、どこでも共通しているマーケットの目玉は「グリューワイン」でしょう。温めた赤ワインに砂糖、スパイスが入っています。暖かさが寒さをやわらげ、スパイスの香りと砂糖の甘さでいくらでも飲めるように感じてしまいます。多くの人が温かいグリューワインを楽しんだ結果、翌朝の開店前マーケットには、12月の新宿駅、渋谷ハチ公前のような匂いが漂います。日本から訪れると、この翌朝の雰囲気も親しみを感じるところです。

「わが町」のクリスマス

グリューワイン

クリスマスマーケットは、キリスト教の行事クリスマスに深くかかわる一方、生活者としては、夜がどんどん長くなり、寒さも厳しくなる11月から、12月に広場にマーケットの屋台が立ち、華やかな灯りがともるのを見るとほっとします。冬の寒さや暗さを乗り越える力が湧き、冬そのものを歓迎する気持ちにもなります。

ドイツ各地でクリスマスマーケットが長く続いているのは、何よりも長い夜、厳しい冬を乗り越える人々の知恵であったからだと思います。

(ニュルンベルクメッセ日本代表部)